



# いわいしま通信

## 『島の細道』紀行文募集およびガイド養成事業が 日本離島センターの助成事業に決定！

祝島ネット21が主催する「『島の細道』紀行文募集およびガイド養成事業」が、(財)日本離島センターの平成14年度離島人材育成基金助成事業に決定しました。

本基金の助成対象となる事業は、離島の人材育成に係る事業で、

- (1) 離島の産業振興を目的とした事業
- (2) 離島の生活文化、福祉の向上を目的とした事業
- (3) 他地域との交流推進を目的とした事業
- (4) その他人材育成に必要な事業

などで、離島で活動している人や団体が自ら取り組む事業に対して、経費の2分の1以下(最高100万円)が助成されるものです。

### <事業実施方針>

「石積み練塀」で知られる祝島の人家の細い道は独特の雰囲気を持っています。また、島の山は里山としての趣と同時に原生林らしさの伺える照葉樹林を持ち、かつては細い道が張り巡らされてい

## 春の遠足 & 花見

3月31日に「春の遠足&花見」を実施しました。今年は桜の開花が例年より1週間も早く、この日がちょうど満開になりました。春休みで島に帰っていた子供たちもたくさん参加しました。午前9時半に「えびす商店」前を出発し、お昼前には北野に到着。北野のセイリの近くの田んぼで、満開の山桜を眺めながらビールを飲んだり、お弁当を食べたりしました。

次回の遠足は11月頃の予定です。四季折々の表情を見せる祝島の山歩きにあなたも参加しませんか？

ました。途絶えそうになっている細い山道を整備しながら、今まで島を育てくれた山についてのさまざまな知識を再認識し、島をガイドする力を育てます。一方で、島を訪れた人に、人家の細い道や狭い山道を歩いてもらい、それをもとに紀行文風に書いた文章を募集し、応募作品を『島の細道』として冊子にまとめます。その作品の中に書かれていることがらを、島へのメッセージとして読み取り、島の魅力作りをさらに推し進める材料にします。

### 『島の細道』紀行文募集中!!

**募集内容：**祝島の細い道を歩いてみて、感想を紀行文風に書いてください。

**応募規定：**400字詰原稿用紙5枚以内。  
ワープロの使用も可。

**応募資格：**祝島を訪れた人なら誰でも可

**締め切り：**2002年12月31日(消印有効)

**応募先：**祝島ネット21『島の細道』係

詳しくはホームページ、ポスターで

<http://www.iwaishima.jp/inet21/hosomichi/>



北野のセイリから山桜を眺める

### 目次

『島の細道』紀行文募集およびガイド養成事業	1
春の遠足&花見	1
<連載> 祝島の歴史を探る	2
<連載> 魚・さかな・肴	4
会員リレーコラム	4
Let's Learn English in Iwaishima!	5
お知らせ&募集	6

草枕旅行く人を祝島  
幾代経るまで齋ひ菜にほむ  
(万葉集より)

<はじめに>

祝島はとても不思議な場所です。古くから海上交通の要所として知られ、神武天皇・神功皇后や除福伝説などの伝承があり八幡信仰や株内制度など他の瀬戸内海の島々とは異なる独特の文化を育んできました。

私にこの島の「不思議」を教えてくれたのは、両親をはじめ祝島の郷土史家ともいえる重村や田原のおじちゃん達と、あの"ことしお"に乗ってやってくる"えびす商店"のお客さんでした。カメラマンや画家、学校の先生など、島で暮らしている私にはわからない魅力や知識を与えてくれました。店を訪れる人の楽しい話を聞いているうちに次第にこの島の歴史や風土に興味を持ち始めました。そしてその興味を広げてくれたのが建築設計という仕事です。建物を計画する上で場所の特性は非常に重要な設計要素の一つです。建物の形態は、法的規制や技術的なことはもちろんのこと、社会問題や経済・歴史的背景などあらゆる方面の資料を分析し、特性を把握しながら、ひとつひとつの問題点を解決していくことによって決まっています。

これまで20年近くそういう作業をしていく中で、様々な分野の書物や資料を読んでいるうち、偶然、島のことを書いたたくさん本に出会いました。なかでも周防大島出身の民俗学者・宮本常一氏の書かれたものは、民俗学に限らず産業や歴史など多岐に渡り、島で生まれ育った私も知らないことがたくさんありました。(もっとも一番驚いたのはそれを私の祖父から聞いたということでした)宮本氏は苦学して独自の民俗学を築き、その一生を研究の為の旅にあけくれた人です。その生き方は物事

をまっとうする手本のように痛烈な印象を与えました。宮本氏の書かれたものの中で特に印象深いのは、日本中の名もない庶民を記録した「忘れられた日本人」という著書です。そこには祝島人のように素朴で、働き者で、苦勞を笑い飛ばして生きているような暖かい人々の姿が生き生きと書かれています。貧しいけれど真っ直ぐで个性的な「忘れられた日本人」は、どんなに自由があっても際限のない私達の欲望とはまったく無縁のところまで生きていて、貨幣価値が最優先される今の時代にはない豊かさがあるように感じました。休みに島に帰省する度に癒される自分自身も何か別の価値観を求めているような気がして、この片隅においやられた島のことをもう一度考える動機にもなりました。

宮本氏の著書の中に祝島の堤の話があり、堤を作るための借金を返し終わった島民の喜びが書かれています。"カタア"や"キタノノセイリ"は小さい時から遠足で慣れ親しんだ場所です。けれど、いつの間にか私達は先祖が苦勞して残してくれた財産だということを忘れていました。個人の権利ばかりを主張する世の中で、島民みんなの為に力を合わせて築いてきたこの堤の話は、私達が忘れてはならない歴史の一端ではないでしょうか。祖先が残してくれた多くの遺産を無駄にしないよう口承伝承も含め、ここに記録し、ひとつずつ検証していきたいと思えます。

私は専門家ではないのでこれを契機にどなたか専門的に研究しようという人がでてくれると非常に嬉しいです。資料は咀嚼して書くつもりですが、ひとりよがりの解釈や間違いも多いと思えますので、どんどん意見を頂いて一緒に島の歴史を残していきましょう。

<神功皇后と祝島>

祝島の出身者で神舞を知らない人はまずいないと思いますが、神舞の起源に仁安説と、仁和説の2つがあるのはご存知でしょうか。私もつい最近、父から聞いて知りました。こういう風に世の中には知っているようで知らないことがたくさんあります。ましてや過去のこととなると、なおさらです。限られた資料や口承伝承の中から推測して時間の空白を埋めていくしかありません。残念ながら祝島に関する古い資料は島の中にはほとんどと言



本土側(光市・室積)から見た祝島と小祝島  
(手前の島は尾島)

っていいくらい残っていません。そういう状況で専門家でもない自分がどれだけ正確なものが書けるかわかりませんが、みなさんの記憶もお借りながら少し考えてみたいと思います。

第1回目は戦前の教育を受けた人はよくご存知の神功皇后の話です。

作家田中繁男の「神功皇后上巻」に神功皇后が仲哀天皇の喪船と共に東へ向かう途中、祝島に寄港する話が約4ページに渡り書かれています。

「島東端の鳥帽子ノ鼻を北西方へと回り込んで、その泊地へと入った。祝島は小祝島と共に大小二つの餅をならべ置いたような格好をしていて、例の天平8年の遣新羅使も両島を眺めるのを楽しみにしていたようである。島の名の[いはふ]とは、勿論[斎ふ]であり、吉事の招来のために身を忌み謹み、恐れ畏こむ毎日を送ることをいい、期待通りに吉事が訪れたなら、それを心より祝ったという。なぜ、祝島が祝島という名をつけられたのかは、祝島より西は急に島影は少なくなり、それで東よりきて西へと向かう場合、航海の安全を斎き祭る場としては、祝島が最後の島であったからである。ここより西は、すでに茫漠たる装摩の海が、どこまでも続いているだけである。」その後は皇后を島まで案内してきた穴門（長門）の遷立が無事到着を祝して、盛大な宴を催し、皇后に「これより行く先々の要塞の地に、皇子と比売神とをまつる社を造り、その手始めにこの島にも一つ造って下さい」と頼みます。皇后は船を護り、その安全を祈るため、島に皇子と比売神とをまつる社を建てました。それが宮下八幡宮の始まりであり、宮下というのも、このときの皇后一行が一夜を過ごした行宮の下というよう

な謂なのであろうと書かれています。そして祝島からは、長門からここまで案内してきた遷立に替わって新しい水先案内人が乗り込んだと続きます。

島に伝承の残る神武天皇や神功皇后は実存しないというのが通説ですが、この本に書かれているように祝島には当時から人が住み、大陸と日本、大和と筑紫を行き来する船の水先案内人として活躍していたのかもしれませんが。入江英親氏の「海を渡る祭り」の中で山惣津に縄文遺跡があると書かれています。こういう高地性遺跡は山城的な性格をもっており、当時、戦国時代に匹敵するような戦乱があったのではないとも言われています。神武天皇や神功皇后の記紀に書かれている話は戦乱の世をデフォルメしたものではないかという説もあり、祝島が古代水軍の必要な拠点であったと考えることもできます。また除福と神武天皇を同一人物だと推測する研究者もいるくらいですから、その両方の伝説が残るこの島には埋もれた宝の山がある！と思っているのは私だけでしょうか。

不思議な巨大石遺構のある行者様あたりを発掘すれば何か新しい発見があるかもしれません。

#### < 参考図書 >

- 「神宮皇后」 田中繁男著（展転社）
- 「海を渡るまつり」 入江英親著（慶友社）
- 「日本神話の考古学」 森浩一著（朝日文庫）
- 「海と水軍の日本史」 佐藤和夫著（原書房）
- 「古代の海の道」 石野博信編（学生社）



復元された「唐古の楼閣」

奈良県を縦断する国道24号線沿いにある唐古・鍵遺跡で、1993年に1世紀の線図で書かれた「唐古の楼閣」のある土器が出土し、その絵を元に復元した建物です。

この道路はちよくちよく利用しますが、しばらくぶりに通ると突然、この建物が出現しました。

弥生時代の日本にない建築様式だったので、中国の建物を見てきた人が描いたとか、中国から技術屋さんが来て建てたとかいろいろ言われていますが、当時から大陸との交流が盛んだったことは間違いのないようです。

その大陸と畿内を結ぶ文化航路の関所のような位置に祝島はあります。



## <連載> 魚・さかな・肴(1) ~ ヒョコタン~

木村 力

ヒョコタンというのはギダ(ベラ、ギザミ)の仲間です。標準名はササノハベラと言うようです。祝島では磯で、ほとんど一年中釣れるように思います。先日、遠足にいったとき、子ども達が数匹釣っていました。体の表面がぬるぬるして鱗をとるのが大変ですが、結構うまい魚で岩場にいます。

祝島の浜の海で子供時代泳いだことのある人がよく見たのは、シマギダとかモンツキーとかいっていたギダで、海底が砂場や小石が多い所だったと思います。祝島では冬場は釣れません。このシマギダやモンツキーは結構高級な魚だそうです。鱗が軟らかいので、煮たり焼いたりするとき、鱗をとらないでもいいと言うことです。標準名はキューセンでシマギダはメス、モンツキーはオスです。ヒョコタンより一クラス上の魚です。

ギダには他にシンキリー(多分キヌベラ)やハナアカ(多分ニシキベラ)というのがいました。ちょっと小ぶりなギダです。大きいものではモブシ(コブダイ)がいます。モブシもギダの仲間のようです。

子供時代には釣ったことがなかったギダの仲間です。釣れるのがムギという魚です。これはオハグロベラです。島の人には食べないようです。私もまだ食べたことがありません。

夏の祝島に帰ったり、来られたとき海をのぞくと、どのギダかきっと目にとまると思います。

図鑑によると広島あたりではヒョコタンはヒョウタンキザミというそうです。祝島と一番近い呼び方です。



ヒョコタン

## 会員リレーコラム(1) ~ 木村 力さん ~

このコーナーは「祝島ネット21」の会員の皆さんに、自己紹介を兼ねて簡単なコラムを書いていただくコーナーです。第1回目は会長の木村力さんの登場です。



木村力 まもなく55歳。祝島出身。

祝島生活4回で合計32年間。3人子供がいて、一番下の子供が今年祝島中学校に入学しました。

二年前には二番目の子供が入学しましたが、どちらも入学生は一人でした。その時のPTA会長の清水敏保さん(清水の敏坊さん)が、祝辞の中に英語の単語を入れてくれました。英語が好きになるようにとの思いからです。今その子は英語が一番好きに育っています。

今年もPTA会長は清水さんです。今年の入学式では

清水さんの同じ思いから、祝辞は全文英語でした。

「Ryo congratulations.

Your dream are becoming a fisherman and running a ryokan. I hope you well do your best toward your dream. I'll cheer you up. Good luck! 」

多分、今年の入学式でPTA会長の祝辞が英語で話された日本の中学校は祝島中学校だけではないかと思えます。敏坊さんをご存じなら清水丸を運転しながら暗唱練習している敏坊さんの姿も思い浮かぶと思えます。子供もきっと英語が好きになると思えます。いいと思ったことはやってみる勇気ももらっただろうと思っています。

2年前に祝島小学校を去った先生からのメッセージです。

「ご入学おめでとうございます。

たった一人の入学式。

世界でひとつの涼くんのためだけの入学式。

まわりの人のあたたかい気持ちに包まれて、

一度しかない中学校生活を有意義に過ごしてください。

」

子供と一緒に、好きな祝島の海と山を味わいたいと思っています。よろしくお願いします。

Part1. Dennis's first visit to Iwaishima

\* デニス は 私の 友達 です。



と言うわけで今回は6コマ漫画でデニス が 祝島 を訪ねて藤永のおばちゃんに泊まるところを聞いて、そこに歯医者に行った山本のふみちゃんがおって泊まらせてあげることになったところまで。

次は藤樹さんが沖に連れていったり、橋部さんが色々島のことを教えたりとゆっくりおもしろく出来たらなあと思っています。

そしてデニスは祝島がとても気に入って帰るというストーリー。

## 活動紹介

### 祝島の山桜を増やそう！

「千本桜」として有名な祝島の山桜ですが、台風などの影響で昔にくらべると少なくなっています。かつての「千本桜」を復活させよう！という活動です。祝島中学校の皆さんのご協力で、昨年収穫した山桜の種が芽を出し、だいぶ育ってきました。

この苗がある程度大きくなった時点で、山に植える予定です。



山桜の苗木

## お知らせ & 募集

### 祝島ガイド養成事業について

表紙のページでもお知らせしましたが、祝島のガイドを養成するため、島の植物の観察会などを実施する予定です。講師の先生や実施予定などは、現在検討中ですので、詳しいことが決まりましたら、ホームページや会報でお知らせします。会員の皆さんの参加をお待ちしています。

### 第2回祝島不老長寿マラソン開催について

昨年、第1回大会を開催し、なかなか好評だったマラソン大会。今年も下記の要領で開催します。ランナーとしての参加、ボランティアとしての参加をよろしくをお願いします。

開催日：8月11日（日）

種目：13kmの部、2kmの部

スタート：午前8：00（13km）、AM8：10（2km）

参加者数：合計100名募集

申込期間：5月13日～7月24日

参加費：13km3000円、2km2000円

参加賞：Tシャツ、地元特産品など

申込先：〒742-1401 山口県熊毛郡上関町祝島

木村力方 マラソン実行委員会事務局

大会HP：<http://www.kakekko.com/marathon/iwaishima/>

### ベルマーク集め

祝島の学校に寄付するために、ベルマーク集めを実施しています。ある程度集まった時点で、祝島ネット21事務局「ベルマーク係」まで随時お送りください。ご協力をお願いします。

## 編集後記

会の発足から1年4ヶ月が過ぎ、ようやく会報の第1号を発行できました。いかがだったでしょうか？ ご感想や、ご意見・ご要望がありましたら、ぜひ、事務局までお送りください。また、会員の皆さんからの投稿も受け付けますので、ドシドシお寄せください。

会報の発行に向けて、いろいろな方にご協力をいただきました。特に、連載記事を引き受けてくれた皆さんには、感謝します。今、あらためて思うのは、何人が力を合わせれば、一人ではできない大きなことを実現できるということです。人は誰でも何かの才能を持っています。その才能を少しずつでも持ち寄れば、すばらしい成果をあげることができるはずです。そして、何かの目標のために力を合わせるの、大変なこともあります、とても楽しいことでもあります。祝島ネット21の活動が、祝島の人たちの楽しみ、会員の皆さんの楽しみに繋がるように、私も楽しみながら努力したいと思えます。

次号は7月発行の予定です。お楽しみに。

（編集長：國弘秀人）

祝島ネット21の活動費は、会員の皆さんの会費でまかなわれています。この会報を会員の募集活動にもぜひお役立てください。

《発行》 祝島ネット21事務局

〒742-1401 山口県熊毛郡上関町祝島

ホームページ <http://www.iwaishima.jp/inet21/>



祝島中学校の横の桜